

生きているテラケンさん

田辺聖子

テラケンさんこと、寺田健一郎さんは実にイイ顔をしていられた。男ぶりというより、その前の「人間ぶり」とでもいうようなものだろうか。もちろん、イイ男というか、男前の、魅力的な中年紳士であられたけれど、何より雰囲気や表情がいい。率直で純朴で、そのくせ芸術家らしい洞察力がゆたかで、一点、愛すべき稚気があるという、イイ男なのである。—テラケンさんの魅力については私が今更、云々することもないが、本職の絵についてはさておき、そういう、氏の人柄がよくあらわれたエッセーの面白さは比類がない。

絵描きさんのくせに、こうも文章が巧いと、われら物書きは困るのである。

氏のエッセーは天衣無縫で、そのくせ、何とも言えぬ品格をそなえ、滋味がある。文章の品位というのは、修行して得られるものではないから厄介だ。どうしようもない。その人の人となり反映してしまうのだ。

ことに感動するのは『エカキの小休止』、これを氏は病床で書かれたという。ガンだご自分でもわきまえていられ、お見舞いにいった人に「あんまり近寄ると、ガンがうつりますよ」と笑いながらいわれたそうである。私はそれを聞いて、「何と意志的な男らしい人だろう」と感動した。きっとさまざまな苦悩を経てこられたに違いないのに、感傷やエゴに捉われず、醒めていられる。その心持が、病床で書かれた文章によく出ていて、冴えわたっている。

そこには天賦のユーモアがあり、溢れて尽きぬ人生への興味、人間への関心がある。はつらつたる生気にみち、

<人生は面白いなあ。人間っていいものじゃないか>

という寺田さんの哄笑がひびいている。これを読んだ人は、誰が死病の床にある人の筆だと思うだろう。

寺田さんは絵も、病床で八点完成されたという。描きたいものが噴出して氏をつき動かしたのであろうか。

寺田さんともっとゆっくり楽しい時間を持ちたかったと、私は心残りだが、氏のエッセーを読むと、肉声を耳もとで聞く思いがし、

<ああ、そうだ、寺田さんはここに生きている>

という気になる。テラケンさんは逝かれたが、たのしいエッセーは生きつづけ、ひとりあるきして、テラケンさんをよみがえらせてくれたのである。

昭和六十一年三月